

ハイビームで照らせ！闇に潜む危険

(中 部) K(株) T. S

そこは夜の山陽道、遠くに三木ジャンクションの緑の看板が明るく見えてきた。その明るさが安心感を与え穏やかな気持ちで走っていたのでした。それが次の瞬間に一変……「何だ、あの白いものは！？」追越車線前方に、白く大きな物体が、エアコン室外機のような？そこへ右後方から急接近する大型トラックのヘッドライトの光、その光が私の4t車を抜き去った瞬間「しまった！」白い物体だけに目を奪われていた私の目の前に走行車線を塞ぐ黒い物、直ぐにそれは黒いソファが裏返し真横になっているのだと分かりました。コンマ1秒にも満たない一瞬にぐるぐると思いを巡らす。「右へ逃げられないか！？」「ダメだ、右後方を見ていない！！」「路肩へ逃げられないか？」「ダメだ、段差で横転するかも知れない！」「もう距離が無い！」「ハンドルを切れば乗り上げるかも知れない！」「もうダメだ、正面から受け止めるしか無い！！」「この高さならフロントバンパーで受け止められるはず…」ブレーキを掛けながら正面で受け止め、そのまま志染バス停へ。

そこには私より一瞬早く白いソファに激突した大型トラックが停止していました。私が止まるなりその人が駆け寄り私のトラックが引き摺っているソファを必死になって引き離してくれたのです。私が路肩に止まるまでの間に引き摺っているソファから火花が出ており引火するのではと助けてくれたのです。既に一部黒く溶けた状態になっていました。私は何と申し訳ない事をしたんだ！白い落下物に気付いた時に直ぐにハイビームにしていれば私がぶつからなだけで無くこの人も事故にならずに済んだかも知れない、ハザードで知らせる事だって出来たはずでは無いか、その私を助けてくれている本当に申し訳無い気持ちで一杯でした。

常々聞かされていた「人の為にと明かりを灯せばそれは自分の目の前をも明るくする」とはこの事だったのだ。あとから思えばこの時車の流れが途絶え、私のトラックが先頭になっていました。三木ジャンクションの看板の明るさがその手前の闇を深くしていたのでしょ。遠くの白いソファその1点に注意を向けてしまった私の目にはその手前が何であるかなど気付くはずがありません。なぜハイビームにしなかったのか、それは高速道路と云う常に誰かが先を走っているから大丈夫だろうとの思いが根拠の無い安心感となっていたのです。

実は、この事故を遡る数年前にはこれ以上に衝撃的な体験をしていました。深夜の国道2号線、荷卸しを終え広島市内から東広島方面に向かっている時でした。登坂車線のある急な坂に差し掛かったところ、いつもなら速い車に道を譲ろうとそのまま登坂車線に入る事が多いのですが、雨が強く後方からのヘッドライトも見えない、このままでいかと坂を登り始めた時、前方左斜めに人が！大きな真っ黒な傘を差し登坂車線のほぼまん中を歩いているのでした。何て危ない人だ！撥ねられるぞ。そう思いつつもその人をあっと云う間に抜き去りバックミラーに見えていた姿も暗闇に消えて行きました。

もしも、後続車のライトが見えていたなら躊躇なく登坂車線に入っていたでしょう。間違い無く撥ねていたに違いありません。朝になってもその事が気になりラジオのニュースの時間になるとその都度聞き耳を立てていました。悪い予感は当たりその人は私が通り過ぎてどれ程も経たない位の時間に撥ねられ即死したとの事でした。何かしてあげられなかったのだろうか、何ともやるせ無い気持ちでした。

以前、田舎に帰省した折、父の実家でその村に何十年ぶりに戻ったと云う人の話が甦りました。「俺、むかし、人を撥ねた事があってね…」その人の話では雨の夜、街灯も無い道路を走行していたところ路地から現れた真っ黒な大きな傘、人だと気付いて急ブレーキを掛けたものの間に合わなかったそうです。

撥ねられたのはお風呂屋さんから帰る途中のお婆さん、雨が強かった為に傘を斜めに差して歩いていたとの事です。きっとその事故が原因で長く生まれ故郷に帰れなかったんだらうな！でも誰かに話を聞いて欲しかったんだらうな、そう思っていたものの自分が同じ様な事故に遭うかも知れないなどとは思ってもみませんでした。

この事故に限らず、夜間歩行者を撥ねる事故の大きな原因としてロービーム走行があります。ロービームの照らす部分のみを見て大丈夫と錯覚してします。ハイビームにしてさえいれば助かった命は数多くあるでしょう。

「ハイビームにさえしていれば…」との後悔を口にする事の無いように肝に命じなければなりません。